



ピロティ。高低差のある敷地に建つ4人家族の家。もともと畑だった既存の斜面を残し、4本の柱でヴォリュームを浮かせた。



階段、スロープを登った奥に玄関を配置し、生活に斜面を取り込んだ。右に見えるコンクリートブロックやセメントで固められた階段は畑の頃の名残をそのまま残した。

地上の家

斜面地の解法

敷地は前面道路から奥に向かって5m高くなっており建ぺい率も大きくはない。施主からの要望は具体的でさまざまな部屋の面積や高さなどが決められていた。庭は手入れができないため要らないともいわれたが、この敷地は緑化率の規定があり、様々な矛盾と戦うこととなった。

元々ここは住宅街に残された畑で、敷地内には作物や木が多くあった。周りの家は切土をして平らな家を建てるか、半地下のガレージをつくりその上に建てていた。しかし、それでは土の移動や擁壁に多額の費用がかかり、地形を無視した庭、もしくは南側に手入れの行き届かない大きな庭ができてしまう。

そこで、畑だった特徴を活かし高低差をおおよそのままに住宅をもち上げた。地上をピロティと緑化の場所にし、地上に水平の広がりを獲得している。玄関は敷地奥に配置し、緑化された場所を通らなければいけない。庭だと荒れていても気にならないかもしれないが、毎日通る道であれば手入れもしたくなるだろうし、ピロティであれ

ば天候問わず子供と遊びたくなるかもしれない。

要望された各室の面積を満たそうとすると建蔽率をオーバーした。居住部を2層だと叶うが、3層では法規も厳しくなり、また建材の高騰時期と重なり平屋形式を採用している。吹き抜けの要望があったLDKは平屋ながら3.8mと高い天井高を維持している。また希望面積確保のため両端部は寝室、収納、水回りを2層とし、階数に含めないロフトとした。さらに緑化率とのせめぎあいからLDKの幅を狭め、I型の平面とし、建築面積に入らない出窓を設けることで平面的に広げ、伸びやかな内部空間を獲得している。

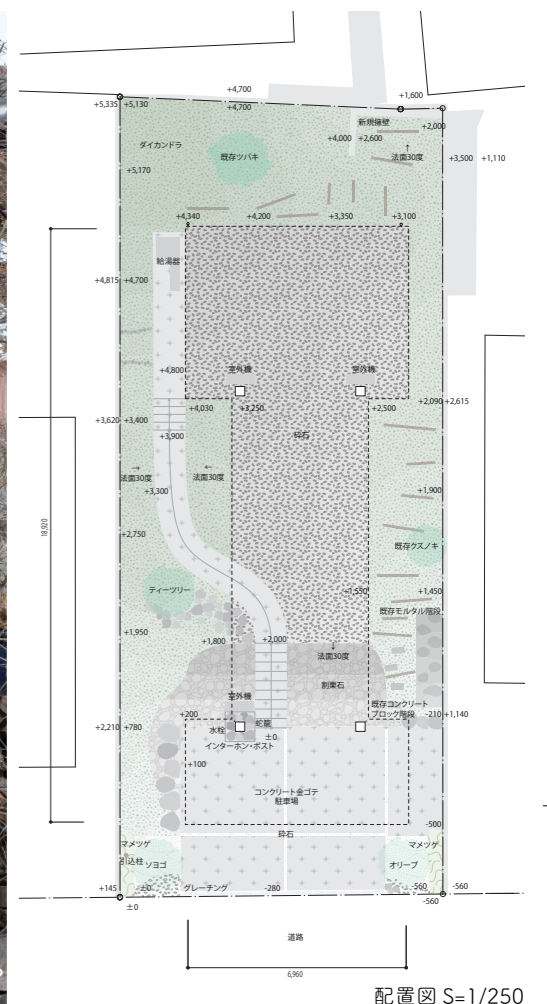
登っていく斜面地に建てる場合、敷地の傾斜に合わせて段々に床をつくっていく形式が多かったように思う。今回の建ち方は、崖上に入口があり斜面は行かない場所とする懸造のような形式と似ているが、入口は崖の低い方にある点で逆転している。斜面地に向き合う新しい解法であり、地上から開放された地の上に建つ住宅となった。



エントランスから前面道路側を見下ろす。階段を数段降り、斜面を降りていくアプローチ。



南西から見る。柱で地面から持ち上がっていることがわかる。



配置図 S=1/250



リビングダイニングキッチン。左右の連窓は建築面積に算定されない出窓とし、外部への広がりをつくる。右の出窓カウンターの低くなった部分はスタディスペース。上部は収納。天井高は約3.8mで1.5層分の高さとした。



主寝室への階段。左は天井高1.4mの納戸。



左に見えるのが主寝室。右奥はクローゼット。



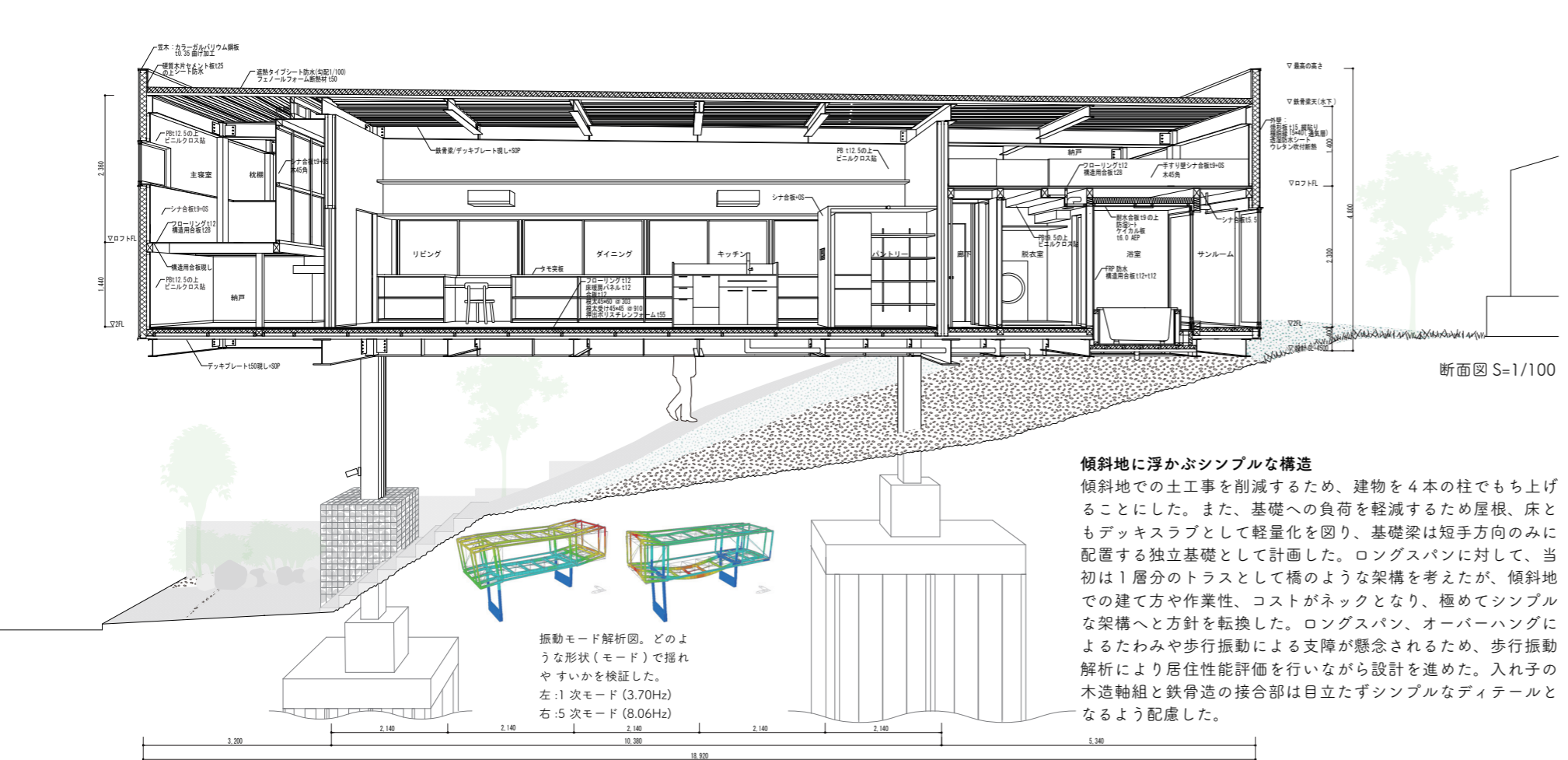
主寝室。左の窓は前面道路側で、近隣の緑化された庭が見える。



左はサニタールーム。通り抜けると子ども室2につながる。右側はエントランスが位置し、回遊性のある水回りと諸室。



風呂と南側庭の間に通路を兼ねたサニタールームとした。爽やかな風呂を獲得できた。

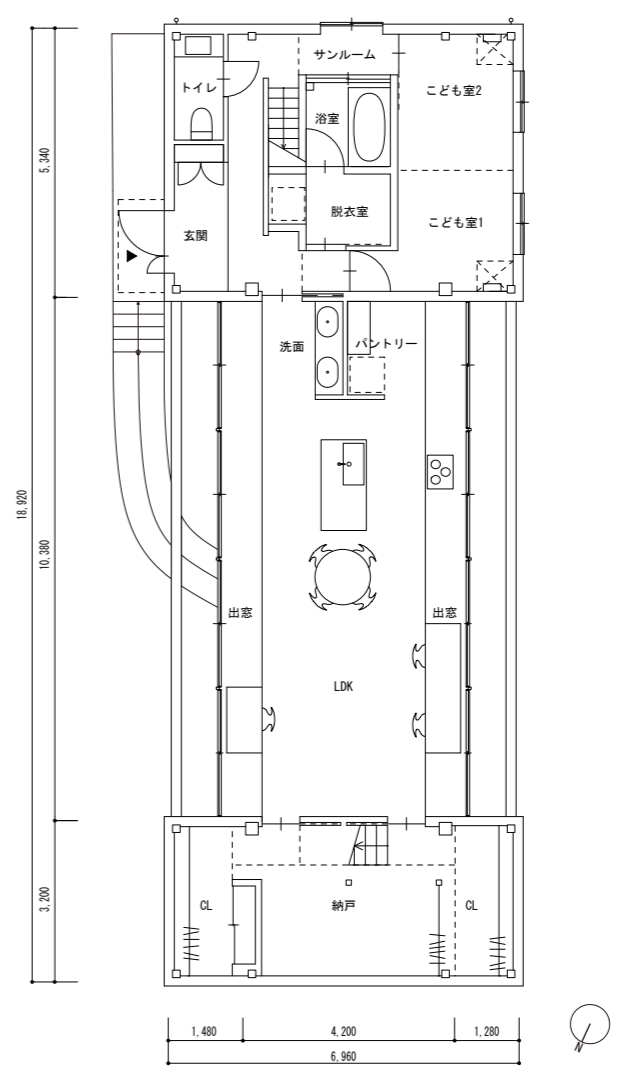


断面図 S=1/100

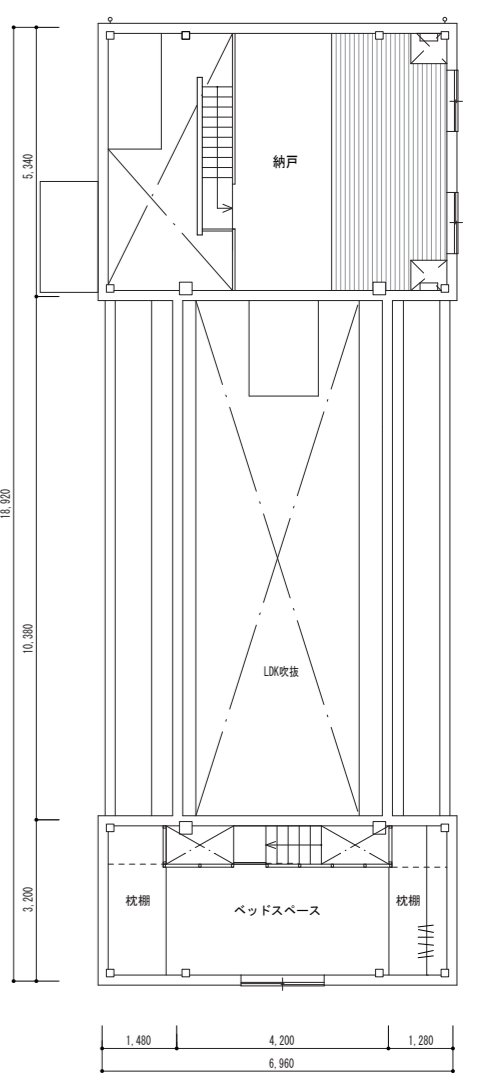
傾斜地に浮かぶシンプルな構造

傾斜地での土工事を削減するため、建物を4本の柱でもち上げることにした。また、基礎への負荷を軽減するため屋根、床ともデッキスラブとして軽量化を図り、基礎梁は短手方向のみに配置する独立基礎として計画した。ロングスパンに対して、当初は1層分のトラスとして橋のような架構を考えたが、傾斜地での建て方や作業性、コストがネックとなり、極めてシンプルな架構へと方針を転換した。ロングスパン、オーバーハングによるたわみや歩行振動による支障が懸念されるため、歩行振動解析により居住性能評価を行いながら設計を進めた。入れ子の木造軸組と鉄骨造の接合部は目立たずシンプルなディテールとなるよう配慮した。

振動モード解析図。どのような形状(モード)で揺れやすいかを検証した。
 左:1次モード(3.70Hz)
 右:5次モード(8.06Hz)



2階平面図 S=1/150



ロフト階平面図 S=1/150